

種姓無為論の起源に関する一考察*

— 『宝性論』 と 『仏性論』 の 'gotra' の翻訳用例を中心として —

金 成 哲**

(韓国 金剛大学校)

序 論

論者は、以前の論文において、現存するサンスクリット本『宝性論』の種姓概念を検討しながら、少なくとも現存するサンスクリット本『宝性論』には、種姓を無為と見なすだけの、いかなる根拠も存在しないという結論に到達した。それにも関わらず、幾人かの現代の学者たちの見解を含め、チベットと東アジア如来蔵思想の伝統では、種姓を無為と見なす見解が現れている⁽¹⁾。

本稿の主目的は、特に東アジアの如来蔵思想の伝統において、現存するサンスクリット本『宝性論』には見えない種姓無為論が、どこに由来しており、その背景は何であるのかを考察するところにある。以前の論文で批判的に検討した現代の学者たちの種姓無為説は、実際には、チベットと東アジアの伝統の解釈を、無意識的に現存するサンスクリット本『宝性論』の種姓概念の解釈に適用したものと見られるためである。

したがって本稿は、東アジアにおける、このような種姓無為論の伝統の一つの淵源として、漢訳『宝性論』の翻訳用語の問題と、特に真諦(499-569)訳『仏性論』の三種仏性関連の句節を検討しようと思う。

まず現存するサンスクリット本『宝性論』(Ratnagotravibhāga、以下サンスクリット本『宝性論』はRGVと略称する)に現れる gotra というサンスクリットの単語を、漢訳『宝性論』(勒那摩提訳、511年)と『仏性

*原題「종성무위론의 기원에 관한 한 고찰— 『보성론』 과 『불성론』 의 'gotra' 의 번역 용례를 중심으로」。

**김성철 (キム・ソンチョル)。金剛大学校仏教文化研究所 HK 教授。

論』(真諦訳、567年?)が、どのように翻訳したのかという点をまず検討する。そして、このような翻訳用語が、後代の幾人かの東アジアの仏教者たちに及ぼした影響を簡略に考察してみようと思う。

他方、『仏性論』に現れる三種仏性論、特に住自性(仏)性概念の変容とその起源について考察する。『仏性論』の三種仏性論は、『宝性論』には見えない『仏性論』独自の概念である。この三種仏性論は、以後、東アジアの仏教者たちに影響を及ぼした点も確認される。この点から、住自性仏性を真如と見なす『仏性論』の言及もまた、種姓無為論の一つの淵源と見られる。しかし、住自性仏性を真如と見なすことは、その背景が明確ではなく、この点に対する一つの考察が、本論文の、もう一つの目的となるであろう。

一 『宝性論』種姓無為説の再検討⁽²⁾

Yamabe (1997: 199) は典型的な如来蔵思想の論書であるRGVでは、有為と無為に対する明確な区別が厳格に現れていないと指摘する。彼はその例として、ブッダの行為が無為から発生するというのを認めていると見られる文章を提示する。加えて彼は、RGVが本来の状態の種姓(prakṛtiśthagotra)を、真如同義語である如来蔵と同一視しているものと見なしている⁽³⁾。このような見解は、種姓を真如と同一視する見解の一つと見ることができる。

ここで、彼が本来の状態の種姓を真如同義語である如来蔵と同一視しているという典拠として提示する文章を再検討してみよう。彼が提示する文章は、如来蔵の十の意味の中の第十番目である不可分離性(asambheda)の意味を説明する部分で現れる。不可分離性を説くI-84頌ab句は、究極的に清浄な状態に到達した如来蔵が、功德と分離されないという説明(cd句)に先立ち、清浄な状態に到達した如来蔵の四つの同義語を羅列している句節である⁽⁴⁾。すなわち法身、如来、[四]聖諦、究極的な意味の涅槃がそれである。I-86頌は、その四種の同義語の意味を説明しているが、その中、二番目である如来という単語の意味を示すのがI-86頌b句である「それ(法身)の種姓がそのように伝来すること」⁽⁵⁾である。すなわち如来(tathāgata)という単語は「そのように伝来すること(tathāgama)」と

いう意味を持っており、その伝来の主体が「それ（法身）⁽⁶⁾の種姓」であり、伝来の方式が「そのような」ということである。この偈頌は散文注釈で次のように再叙述される。

それ（法身）の種姓 [すなわち] 本性が不可思議な方式で完成されたという意味である⁽⁷⁾。

すなわち「種姓」が「本性 (prakṛti)」へ、「そのような」が「不可思議な方式 (acintyaprakāra)」へ、「伝来」が「完成 (samudāgama)」という意味に解釈され、またこれが如来という単語の意味となるのである⁽⁸⁾。以上の意味に対する経証として、本来の状態の種姓に対する〈菩薩地〉の定義が引用されている。

それと関連して [次のように] 説かれた。[本来の状態の種姓とは] 六処の特別な様態である。それは、そのように無限な過去から流れてきたものであり、自然的に獲得されたものである⁽⁹⁾。

これは I-150 頌が、本来の状態の種姓が法身の発生のための原因であると見なす点⁽¹⁰⁾ともよく一致する。たとえ六処の特別な様態という具体性は喪失してしまっているにも関わらず、本来の状態の種姓が法身を獲得するための原因と見なされているのである⁽¹¹⁾。しかし、ここには本来の状態の種姓それ自体が法界と同一視されていると主張できる根拠は見えない。この文章の引用意図は、如来という単語の語義解釈に対する経証を提供するだけであり (tathāgama = tādrśaḥ paramparāgata = tathāgata)、種姓の性格に対する、いかなる論議も含んでいない。したがって、この句節を根拠として、本来の状態の種姓を法界と同一視する Yamabe の主張は首肯し難い⁽¹²⁾。

二 『宝性論』 と 『仏性論』 の Gotra の翻訳用例

以下は、現存する RGV の I 章後半部、すなわち I-27 頌以下に現れる 'gotra' の用例を、漢訳『宝性論』および『仏性論』に現れる翻訳の用語と対照したものである。対照の範囲を I 章の後半部に制限したのは、如来蔵の三つの側面と関連した gotra 概念は、I 章の前半部には現れないため

ある⁽¹³⁾。また、RGV 28,1 と、35,10、36,12 に現れる *aparinirvāṇagotra* (ka) という用例と、35,11 に現れる *śamaikāyanagotra* は除外した。これらの概念は、如来蔵の三義の中の種姓概念とは多少、距離があるためである⁽¹⁴⁾。種姓 (gotra) の翻訳の用例は漢訳『宝性論』の翻訳の用例を基準とし、1) 仏性あるいは如来性と翻訳した場合、2) 真如仏性、あるいは真如性と翻訳した場合、3) 性とだけ翻訳した場合、4) その他の単語で翻訳した場合や翻訳が抜けた場合と、大きく分けてみることができる。『宝性論』に翻訳が抜けている場合には、対応する『仏性論』の翻訳の用例を基準とした。

一方、丸数字は、種姓という単語が現れた順序を意味する。この中、① - ③は、如来蔵の十義を説明する前に如来蔵の三義をまず提示する部分である。④は、如来蔵の十義の中、第一である本質 (*svabhāva*) を如来蔵の三義と関連させて説明する部分であり⁽¹⁵⁾、⑤ - ⑪は、如来蔵の十義の中、作用 (*karma*) に該当する部分である。⑫ - ⑭は、如来蔵の十義の中、無差別 (*asambheda*) に該当する部分であり、⑮ - ⑲は、如来蔵の三義を『如来蔵経』の九喩と関連させて説明する部分である。最後に⑳は、如来蔵に対する信を強調した部分である。これによって分かるように、種姓という単語は、如来蔵の三義と関連した① - ③と、④および⑮ - ⑲に最も多く現れ、次には如来蔵の十義の中、作用を説明する部分に見えることが確認できる。

1. 仏性あるいは如来性と翻訳した用例

②

R (26,6) : *gotratāś ca sadā sarve buddhagarbhāḥ śarīriṇaḥ* //28cd//

『宝』(828a26) : 皆実有仏性 是故説常有

『仏』 : 該当する翻訳語は無し。

④

R (27,8) : *tathāgatagotre sattvakaruṇāsniḡdhasvabhāvatām svalakṣaṇam ārabhya vārisādharmyaṃ veditavyam* /

『宝』 : 該当する翻訳語は無し。⁽¹⁶⁾

『仏』(796c17-19) : 三潤滑性者、弁如来性、於衆生中、現因果義。由大悲於衆生、軟滑為相故。

⑦

R (36,9) : *agotrānām na tad yataḥ* ⁽¹⁷⁾ //41d//

『宝』(831a22) : 若無仏性者、不起如是心。

『仏』(799c19) : 若無清淨之性、如是二事、則不得成。

⑨

R (36,11-12) : *yadi hi tad gotram antareṇa syād ...*

『宝』(835a25) : 離仏性

『仏』 : 該当する翻訳語は無し。

⑮

R (69,19) : *svabhāvo dharmakāyo 'sya tathatā gotram ity api* /144ab/

『宝』(838b4) 法身及真如、如来性実体。

『仏』(808a15) : 三種自性者、一者法身、二如如、三仏性。

⑯

R (70,1) : *trividhabuddhakāyotpattigotrāsvabhāva iti /*

『宝』(838b11) : 能生三種仏身、示現如来性。

『仏』(808a16-17) : 後五譬仏性。

⑰

R (71,18) : *gotraṃ tad dvi-vidhaṃ jñeyam* /149a/

『宝』(839a1) : 仏性有二種

『仏』(808b15) : 仏性有二種

⑱

R (72,1) : *buddhakāyatrayāvāptir asmād gotradvayān matā* /150ab/

『宝』(839a4) : 依二種仏性、得出三種身。

『仏』(818b16-17) : 諸仏三身、因此二性、故得成就。

⑳

R (73,10) : *niyatagotrāsvabhāvaḥ*

『宝』(839b7) : 畢竟定仏性体

『仏』 : 該当する翻訳語は無し。

以上のように「gotra」を「仏性」あるいは「如来性」と翻訳する用例は、『宝性論』と『仏性論』を問わず、最も多く現れる。問題は、「gotra」を「種姓」あるいは、それに順ずる他の用語⁽¹⁸⁾ではない「仏性」という

用語で翻訳した点である。『宝性論』導入以前、『涅槃経』の解釈から出発する東アジアの仏性思想において、「仏性」という漢訳語の原語は「tathāgatagarbha」特に「buddhadhātu」であることが、既に指摘されている⁽¹⁹⁾。しかし如来蔵思想の脈略において、「種姓 (gotra)」という概念が全く現れていない『涅槃経』の「tathāgatagarbha」あるいは「buddhadhātu」の翻訳語として既に定着した「仏性」を、『宝性論』の「gotra」の翻訳語として採択したことには問題が無きにしもあらずである。如来蔵思想の理論化／体系化を企図する『宝性論』では、「如来蔵 (tathāgatagarbha=tathāgatādhātu)」という上位概念の三つの側面の中の一つとして、換言すれば如来蔵の下位概念の一つとして「種姓 (gotra)」を扱っているためである。『宝性論』の漢訳者であるラトナマティ (勒那摩提) が「種姓」に対する翻訳語として、既存の「仏性」という単語を採択することにより、以後、東アジアの如来蔵思想では、上位概念としての「仏性」概念と、下位概念としての「仏性 (= 種姓)」概念の混用を呼び起こしたものと見られる⁽²⁰⁾。

2. 真如仏性、あるいは真如性と翻訳した用例

③

R (26,8-9) : tathāgatagotrāsadbhavārthena ⁽²¹⁾ ca /

『宝』(828b5) : 三者、一切衆生、皆悉実有、真如仏性。⁽²²⁾

『仏』 : 該当する翻訳語は無し。

⑧

R (36,10-11) : ... etad api śuklāmśasya pudgalasya *gotre* sati bhavati ... /

『宝』(831a25) : 此二種法、善根衆生、有一切依因、真如仏性。⁽²³⁾

『仏』(800a7) : 故浄分人、由清浄性、此觀得成。

⑫

R (55,12) : tadgotrasya tathāgamaḥ /86b/

『宝』(835b25) : 及彼真如性 ⁽²⁴⁾

『仏』 : 二者、一切処皆如。

⑬

R (55,15) : tadgotrasya prakṛter acintyaprakārasamudāgamārthaḥ /

『宝』(835b29) : 及彼真如性者

『仏』(812a2) : 此性一切処皆如者

既に前の論文(金成哲 2012: n.47)⁽²⁵⁾ で扱ったように、この「真如仏性」という用語は、『宝性論』では全9回登場する。その中では単独で使用された *gotra* を翻訳した場合も2回現れる。よってここでも *gotra* という一つの単語を翻訳したものと見なす。しかし、『宝性論』において真如仏性と翻訳された単語は *gotra* よりは *dhātu* が1回多い。すなわち意味のある違いと見るには困難であるが、真如仏性は *gotra* よりは *dhātu* の翻訳語として、より好まれたのである。

現段階では、③と⑧になぜ「真如仏性」という翻訳語が採用されたのかを解明するのは難しい⁽²⁶⁾。これと似た例は、「真如性」という翻訳語の場合にも現れる。⑫と⑬とを含め、真如性という単語は『宝性論』をあわせて全9回現れる。その中、⑫と⑬とを除いた残りの用例は次の如くである。まず偈頌本である 816a25 に現れる「真如性」は「*buddhadhātu*」(RGV 77,14) の翻訳語であり、散文注釈と共に現れる 840c1 では「如来性」と翻訳されている。次に 832c2 の「(如来) 真如性」は、(*tathāgata-*) *dhātu* (RGV 42,4) の翻訳語であり、840a14 の「真如性」も「*tathāgatadhātu*」(RGV 76,6) の翻訳語であり、840c12 の「真如性」は「*dhātu*」(RGV 78,6) の翻訳語である。840c23 の「真如性」は代名詞「*tad*」(RGV 78,17) を翻訳したものであるが、内容上、840c12 の「真如性」すなわち「*dhātu*」を指す。最後に 841a4 の真如性は、代名詞「*sā*」(RGV 79,4) を補充したものであり、内容上、無垢真如 (*nirmalā tathatā*, RGV 79,2) を指す。

以上からもわかるように、「真如性」という翻訳語は、⑫と⑬、そして代名詞「*sā*」を補充した場合を除外すれば、みな (*tathāgata/buddha-*) *dhātu* の翻訳語として使用されたということが確認できる。

3. 性と翻訳した用例

⑥

R (36,9) : *gotre sati bhavati etad /41c/*

『宝』(831a21) : 此依性而有

『仏』: 該当する翻訳語は無し。

⑩

R (36,13) : na ca bhavati tāvad yāvad āgantukamalaviśuddhigoṭraṃ trayāṇāṃ anyatamadharmādhimuktiṃ na samudānayati ...

『宝』(831a28ff) : 以性未離一切客塵煩惱諸垢、於三乘中、未曾修習一乘信心。

『仏』(800a15-16) : 是清淨性、不為客塵之所染汚、隨三乘中未起一乘信樂。

⑪

R (37,3-4) : na khalu kaścit prakṛtviśuddhigoṭrasaṃbhavād atyantāviśuddhidharmā bhavitum arhati /

『宝』(831b8-9) : 以彼実有清淨性故、不得説言、彼常畢竟無清淨性。

『仏』(800c18019) : 若有衆生、有自性清淨性⁽²⁷⁾、永不得解脫者、無有是處。

⑫

R (55,19) : nityaṃ tadgoṭraṃ samadharmatayeti /

『宝』(835c4) : 彼性本際來常、以法體不變故⁽²⁸⁾。

『仏』(812a9) : 性相常然 (?)

⑬

R (72,8) : ... trividhabuddhakāyotpattigoṭrasvabhāvārtham ...

『宝』(839a12-13) : ... 生彼三仏法身、以依自体性 ...⁽²⁹⁾

『仏』 : 該当する翻譯語は無し。

4. その他の用例

① 『宝』と『仏』みな翻譯語が無い場合

R (26,3-4) : bauddhe gotre tatphalasyopacārād uktāḥ sarve dehino buddhagarbhāḥ //27cd//

『宝』(828b10-11) : 依一切諸仏、平等法性身、知一切衆生、皆有如來藏。

『仏』 : 該当する翻譯語は無し。

⑤ 『宝』で正因と翻譯した場合

R (36,2-3) : tatra samāsato buddhadhātuviśuddhigoṭraṃ mithyātvanīyatānāṃ api sattvānāṃ dvidividhakāryapratyupasthāpanaṃ bhavati /

『宝』(831a11-12) : 略説、仏性清淨正因、於不定聚衆生、能作二種業。

『仏』(799c17) : 此清浄性、事能有二。

以上、『宝性論』と『仏性論』の「gotra」の翻訳用例を検討した。この中、最も特異な点は、③と⑧において『宝性論』が gotra を「真如仏性」と翻訳したことで、⑫と⑬で「真如性」と翻訳したことである。

前に既に指摘したように、この二つの翻訳語はみな「dhātu」と「gotra」という二つが相互に密接に関連しているが、厳密に区別される二つの単語の訳語として使用した。そして事実上、後者よりは前者の訳語として、より好まれたことが確認できる。

しかし「gotra」を、このような真如仏性、あるいは真如性と翻訳したのは、元来の意味を⁽³⁰⁾喪失したまま、東アジアの仏教者たちに受け取られたものと見られる。すなわち「真如」という付加語を通して、如来蔵思想の種姓概念を無為と見なす立場の根拠となったのである。我々はそのような理解の代表例を、元暁(617-686)⁽³¹⁾と法蔵(643-712)⁽³²⁾の著作で確認することができる。特に法蔵の場合、明確に種姓を有為無常の側面と無為常住との二つの側面に分け、後者の根拠として⑬の『宝性論』の文章を提示している。この句節は、第I章で検討したように、YamabeがRGVの種姓概念を無為と見なしながら提示していた、まさにその文章に対応する『宝性論』の句節である。現代の学者たちの種姓無為論には、まさに、このような東アジアの伝統的な理解方法が背景にあるのである。そして東アジア的な種姓無為論の形成には、『宝性論』の翻訳用語すなわち「gotra」の翻訳語に「真如」が付加されたことが、大きな役割を果たしたことが確認できる。

しかし翻訳用語上の問題は別として、RGVの「gotra」の用例と対応する部分の『宝性論』と『仏性論』自体の内容のみから判断すると、『宝性論』と『仏性論』でも「gotra」を無為と理解した痕跡は発見されない。種姓を明確に無為と見なす句節は、RGVとは対応しない『仏性論』の独自の部分に現れる⁽³³⁾。

三 『仏性論』の住自性仏性(praktisthagotra)概念について

以上、「gotra」の翻訳用例を通して、東アジア仏教の種姓無為論の一つ

の淵源が「gotra」の翻訳用語上の問題と関連しているということを検討してきた。本節では『仏性論』に現れる三種仏性論、特に「住自性仏性 (praktisthagotra)」概念を中心に、種姓無為論のもう一つの起源を検討しようと思う。

RGVにおいて praktistha (-gotra) という単語は I-149 頌にただ一度だけ現れる⁽³⁴⁾。続く偈頌でそれは法身の原因と見なされるが、それ以上どのような説明も現れない。これに比べて『仏性論』は三因 [仏性] と三種仏性という形態で、二つの仏性、あるいは三つの仏性概念を扱っている⁽³⁵⁾。RGVに対応する部分はないが、この時、住自性性と引出性という用語のサンスクリット原語が「praktisthagotra」と「samudānītagotra」だという点ははっきりしている⁽³⁶⁾。したがって二つの種姓概念を三つの仏性概念に拡張させて議論するのが『仏性論』に由来することには、異論の余地が無いであろう。

『仏性論』はまず、仏性の概念を三つの原因 [としての仏性] と三つの種類の仏性と区分する。

その中、三つの原因 [としての仏性] に対して『仏性論』は次のように定義している。

三つの原因 [としての仏性] とは、第一に、獲得しなければならないものの原因 (応得因, *prāpya-hetu)、第二に努力の原因 (加行因, *prayoga-hetu)、第三に完成することの原因 (円満因, *paripūrṇa-hetu) である。[その中で] 獲得しなければならないものの原因とは、[我空と法空という] 二つの空 [性] により特徴付けられる (*prabhāvita)⁽³⁷⁾ 真如である。この空 [性] を原因として、菩提心 (*bodhi-citta) と努力 (*prayoga) などと [修行] 道 [を終えた以] 後の [究極的な結果である] 法身 (dharma-kāya) まで獲得しなければならない。そのため獲得しなければならないもの [の原因] であると称する⁽³⁸⁾。

この引用文で、まず目につく部分は、獲得しなければならないものの原因 [応得因] の定義である。それは応得因が、一般的に大乘仏教の基本的な思想と見なされる人無我と法無我、すなわち二つの空性の同義語であると同時に、肯定的表現である真如で定義されるという点である。『仏性論』の前の部分では、これと同一の句節が仏性の定義としても現れる⁽³⁹⁾。こ

の真如を原因として、他の二つの原因である努力の原因〔加行因〕すなわち菩提心と、完成の原因〔円満因〕すなわち努力とが獲得される。続く説明では、獲得しなければならないものの原因は無為に、努力の原因と完成の原因は有為に分類されている。

この三つの原因〔の中で〕前の一つは、無為の真実なる理致を本質とし、後の二つは有為の願と行とを本質としている⁽⁴⁰⁾。

換言すれば、無為である真如が、有為である菩提心 (bodhicitta)、努力 (prayoga)、法身 (dharmakāya) を獲得するための最も根本的な原因、あるいは基盤となると見なしている。

続いて注目すべき点が、まさに無為と見なされる応得因が、三種仏性を備えて〔具有〕いると説明することである。

三つの仏性 (*buddha-gotra) とは、獲得されなければならないものの原因 (= 真如) の中に備えられた三つの〔仏〕性である。〔それは〕第一に本来の状態の〔仏〕性 (住自性性、prakṛtistha-gotra)、第二に開発された〔仏〕性 (引出性、samudānīta-gotra)⁽⁴¹⁾ 第三に〔結果を〕獲得した〔仏〕性 (至得性、* (phala-) prāpta-gotra) である⁽⁴²⁾。

この三つの仏性は、明白に RGV k.149-150 で説く二つの種姓を前提としている⁽⁴³⁾。しかし『仏性論』において RGV k.149-150 の翻訳に該当する部分は⁽⁴⁴⁾、ただ二つの仏性、すなわち本来の状態の仏性と開発された仏性だけを認定しているという点とは一致しない。加えて、上の引用文を含む段落全体が、RGV に対応する部分が無い⁽⁴⁵⁾。したがって第三の種姓である結果に到達した仏性は、RGV では確認できない『仏性論』独自の概念と見なければならないであろう⁽⁴⁶⁾。

この三つの仏性の中、前の二つの仏性は、明白にその原語が「prakṛtisthagotra」と「samudānītagotra」であるという事実は既に指摘した。「具有」という単語の意味が正確に何を意味するのかが明確ではないが⁽⁴⁷⁾、少なくとも三つの仏性を真如の範疇に含めて理解している点は明確に見える。換言すれば、この文章は、たとえ仏性という用語で翻訳されたとしても、内容的には種姓と真如概念とを融合していたり、あるいは真如を種姓と見なしていると解釈できるということである。特に導入部で本来の状態

の種姓と関連して、如来蔵の三つの意味の中、能摂蔵を説明する次のような文章は、これを明確に示すものである。

ブッダは本来の状態 (prakṛtisthā) の [種姓すなわち] 如如 (tathatā) [住自性如如] に基づいて (*adhikṛtya) 『如来蔵経』で「すべての衆生はこの如来蔵である (sarvasattvās tathāgatagarbhāḥ)」と説いた⁽⁴⁸⁾。

この文章は、核心的な一つの単語を除外すれば、RGVで如来蔵の三つの本質を説明するための導入文と正確に一致する⁽⁴⁹⁾。すなわち有垢真如 (samalā tathatā) が住自性如如 (*prakṛtisthā tathatā) に対置されているのである。また、住自性如如 (*prakṛtisthā tathatā) とは、上で見た二つ、あるいは三つの種姓の中、本来の状態の種姓 (prakṛtisthagotra) 以外の他のものを指したとは考えられないであろう。この地点で、住自性仏性 (prakṛtisthagotra) は、住自性如如、あるいは(有垢)真如と等置される。

このような種姓と真如との同一視は、『宝性論』と『仏性論』が紹介される以前の東アジア的な仏性論争の影響をいったん脇に置くとすると⁽⁵⁰⁾、少なくとも次のような二つの理由で説明できるであろう。

第一に、如来蔵を、法身と真如と種姓とに三分して理解する以前の、より古い形態を示す基本の偈頌 (śloka) の思想に忠実な解釈であると見ることができる。RGVの基本の偈頌には精神的な性向を意味する瑜伽行派的な意味の種姓概念は現れていない。代わりに有垢真如 (samalā tathatā) と無垢真如 (nirmalā tathatā) の関係としてだけ、三宝の発生を説明している⁽⁵¹⁾。このような構図では、RGVの注釈偈頌と散文注釈から現れる瑜伽行派的な種姓概念、すなわち三乗のどれか一つに対する信により表現される精神的な性向という意味の種姓⁽⁵²⁾の役割は弱まるしかない。もし真諦が、このような立場に立っていたならば、それは現存するサンスクリット本『宝性論』とは、微妙な解釈上の違いを示していると言える。

第二に、当時、発展し始めた『現観莊嚴論』とアーリヤ・ヴィムクティセーナ (Ārya Vimuktisenā) の『現観莊嚴論註』に見える種姓観念の影響という可能性も排除できない⁽⁵³⁾。6世紀初に活躍したアーリヤ・ヴィムクティセーナは、本来の状態の種姓を六処の特別な様態であると主張する瑜伽行派の種姓論を批判し、修行の基盤 (pratipatter ādhāra)、すなわち種姓を無為に属する法界であると主張する。

そのため、これ〔『現観莊嚴論』1-5cd句⁽⁵⁴⁾に〕より、〔法界が〕聖なる法の原因であるために、法界だけが本来の状態の種姓（prakṛtisthaṃ gotraṃ）であると同時に、正しい〔精神的〕実践の基盤（pratipattyaḍhāra=gotra）であると教える⁽⁵⁵⁾。

他の人々（瑜伽行派）は次のように主張する。「種姓とは六処の特別な様態であり、それは二つである。〔第一は〕条件により開発〔された種姓であり、第二は〕本来の状態〔の種姓〕である」。彼らは「本来の状態の種姓（prakṛtistha-gotra）」の中の「本来の（prakṛti）」という単語の意味を説明しなければならない。〔本来のという語の意味が〕原因と同義語であると〔主張〕するならば、その〔本来の状態の種姓〕もまた、条件により開発された〔種姓と同じ意味となる〕であろう。それならば、〔二つの種姓には〕どのような意味の違いがあるのか。しかし〔prakṛtiが〕法性（dharmatā=dharmadhātu）の同義語であるとするならば、そのような誤謬は存在しない。彼ら（瑜伽行派）の〔種姓概念は〕言語的なこと（prajñaptika）であるが、我々の〔種姓概念は〕確定的なもの（lākṣanika）である。よって彼らと我々〔の種姓概念の解釈〕は一致しない⁽⁵⁶⁾。

この引用文において、アーリヤ・ヴィムクティセーナは、本来の状態の種姓の中の、「本来の」（prakṛti）という単語を法界（dharmadhātu）、あるいは法性（dharmatā）と同義語と見て、本来の状態の種姓（prakṛtisthagotra）または法界、あるいは法性であると見なしている。たとえ認識対象としてだけ、そして聖なる教えの原因としてだけに限定されるとしても⁽⁵⁷⁾、無為である法界が本来の状態の種姓と見なされることは『現観莊嚴論』⁽⁵⁸⁾に由来するものと見られる⁽⁵⁹⁾。

一方、安慧が、真如を種姓と見なす説を紹介しているという点も注目すべきである⁽⁶⁰⁾。この時、真如を種姓と見なす人たちが誰なのかは不明確であるが、少なくとも種姓を真如と見なす見解は安慧にも知られていたことが確認される。安慧と真諦との関連性を念頭に置いて見る時⁽⁶¹⁾、真諦もやはり種姓無為論を知っていた可能性が高い。RGVには現れないにも関わらず、真諦が彼の『仏性論』で種姓、特に本来の状態の種姓を無為である真如と見なすことは、このような『現観莊嚴論』の影響か、少なくとも、そのような思考方式を共有していた結果であると推測してみる事が

できるであろう。

結 論

以上、考察の内容を要約すれば次の如くである。

まず、幾人かの現代の学者、特に日本の学者たちが主張する如来蔵思想の種姓無為論は、現存するサンスクリット本『宝性論』には、その根拠を探すことはできない。それにも関わらず、彼らが『宝性論』の種姓概念を無為と見なしたのは、チベットと東アジアで形成された種姓無為論を無意識的に現存するサンスクリット本『宝性論』に投影したからであると見られる。

続いて、東アジアの伝統に現れた如来蔵思想の種姓無為論は、『宝性論』の翻訳用語上の問題と真谛訳『仏性論』とに由来するものと見られる。『宝性論』と『仏性論』は *gotra* を「種姓」ではなく「仏性」と翻訳する。『宝性論』はここから一步進んで「真如仏性」、あるいは「真如性」と翻訳することにより、後代の東アジアの仏教者に、種姓を真如と見なすことのできる根拠を準備したのである。

『仏性論』は、『宝性論』の抄訳であると同時に、講義と注釈とが付加された一種の『宝性論』の注釈書の性格も持つ。加えて『仏性論』には、『宝性論』には見えない独創的な説も発見される。三因仏性論と三種仏性論も、その中の一つである。『仏性論』は、三因中の一つである応得因を真如と定義し、三種の仏性がこの応得因に含まれると明確に主張する。さらに三種仏性の一つである住自性性 (*praktistha-gotra*) を住自性如如 (*praktistha-tathatā*) と見なすことにより、これを再確認している。したがって東アジアの如来蔵思想の伝統において、明確に種姓を真如と解釈するのは『仏性論』に由来すると見ることができる。

最後に、『宝性論』と『仏性論』以前の東アジア的議論をいったん別にするれば、このような種姓無為論の淵源として二つのことが推測される。一つは、『宝性論』の注釈偈頌や散文注釈よりは基本偈頌をより重視した傾向が反映した可能性である。もう一つは、瑜伽行派系統の種姓概念ではなく、『現觀莊嚴論』系統の種姓概念の影響の可能性である。

注

- (1) チベットで RGV の種姓概念を法性、すなわち無為と見なす見解については ツォンカパの *gSer phreng* (339,8ff. = 高崎 (2010: 332f.) 参照。しかし、彼が引用し、種姓無為論の根拠としている RGV I-113 頌は、現存する RGV の I-113 頌と一致しない。すなわち *gSer phreng* に引用されている I-113b は *dri med bshag dang bsal med chos nyid kyang* (= 中村 (1967: 123)) であるが、これは現存する RGV I-113bc の '*acintyam akṣayyadharmāmala*-' と一致しないのである。高崎 (2010: 346, n.103) は、韻律を考慮しないまま、この句節を次のように還梵している: **nopaneyāpaneyadharmatā*。しかし現存する RGV の句節が漢訳『宝性論』(大正蔵 31, 815b8) 「有不可思議 無盡法寶藏」とは一致するという点から、チベット訳、あるいはその底本が伝承過程の中で、法界あるいは法性を種姓と見なす傾向に、より修正された可能性を排除できないであろう。一方、チベットで本性住種姓 (*prakṛtistha-gotra*) を法性、あるいは真如と見なすことに対する『現觀莊嚴論』の影響については 車相燁 (2013: n.60 + n.61) 参照。
- (2) 以下の議論は本稿の理解を助けるため、金成哲 (2011: 56ff.; 2012: 391ff.) を一部、修正・補完して再び紹介するものである。
- (3) RGV の種姓、特に本性住種姓を法界、あるいは真如など、無為と見なす現代の学者としては、Yamabe のほかに、高崎と小川とを挙げることができる。高崎 (1989: 326, n.2) は、本性住種姓を法界であると同時に、本性清浄と見なしており、小川 (2004:100) も、本性住種姓を真如と見なしている。しかし、高崎と小川の種姓無為論は、その根拠が明確ではない。一方、Yamabe (1997, 449, n.40) は、本性住種姓を真如と同一視することは『大宝積経』「迦葉品」の影響を受けたものであろうとするが、逆に如来蔵思想の影響で「迦葉品」の本来の単語が代替された可能性もあると見る。
- (4) RGV 55,3-6: *sa dharmakāyaḥ sa tathāgato yatas tad āryasatyam paramārthanivṛtiḥ / ato na buddhatvam rte 'rka-raśmivad guṇāvinirbhāgatayāsti nivṛtiḥ //84//*
- (5) RGV 55,12: *tadgotrasya tathāgamah/*
- (6) 代名詞 *tad* を、法身を指すものと理解することに対しては、金成哲 (2011: 57) 参照。
- (7) RGV 55,15-16: *tadgotrasya prakṛter acintyaprakārasamudāgamārthaḥ/* この句節全体は、脚注 5) の偈頌と同じく『宝性論』(大正 31, 835b25 + 835b29) では「彼真如性」と翻訳される。この句節に対する東アジア的理解の変容の様相については以下の議論を参照。
- (8) このような、類似語源的な説明は MSA IX-37 頌を連想させる。: ... *tathātā śuddhim āgata / tathāgatatvam ...* (... 如来とは清浄に到達した真如である ...) しかし MSA の場合、到達の主体が真如である反面、RGV は種姓という点

に決定的な違いがある。そのため再度、種姓が有為であるか、無為であるかという点が問題となる。この偈頌は『宝性論』（RGV 71,16-17）でも如来蔵の三自性の中の真如を説明しながら引用される。

- (9) RGV 55,16-17: yam adhikṛtyoktam/ śaḍāyatanaviśeṣaḥ sa tādṛśaḥ paramparāgato 'anādikāliko dharmatāpratīlabdha iti/
- (10) RGV 72,1-2: buddhakāyatrayāvāptir asmād gotradvayān matā / prathamāt prathamāḥ kāyo ...
- (11) 以上の説明は金成哲（2011: 56ff.）参照。
- (12) しかし以下で検討するが、この句節は、東アジアの仏教者には如来蔵思想において種姓無為説の根拠として受け取られている。
- (13) Ruegg（1976: 348）は、I 章 26 頌以前の種姓概念は、7 種の金剛句の中、後の 4 種の金剛句である有垢真如、無垢真如、ブツダの功德、ブツダの行為全体を指す概念であるのに比して、27 頌以後の種姓概念は、7 種の金剛句の中、第四の金剛句である有垢真如、すなわち如来蔵の三つの本質、あるいは側面の中の一つを指す概念であると指摘する。前者を広い意味の種姓であるとすれば、後者は狭い意味の種姓であるとも言える。
- (14) ただ、この場合、『宝性論』と『仏性論』で翻訳が抜けている 35,11 (aparinirvānagotra) と 35,12 (śamaikāyanagotra) の翻訳を除外した、他の二つの場合には、みな無般涅槃性と翻訳されている。
- (15) 如来蔵の十義の中、本質と関連したこの段落は、チベット訳とは一致するが、漢訳『宝性論』とは多少違いがある。漢訳『宝性論』には、如来蔵の三義と関連した詳細な説明が現れていない代わりに、現存するサンスクリット本には見えない「思者、依如来法身、所思所修、皆悉成就故」（大正 31、p.282b29）が代替されている。
- (16) 『宝性論』には如来蔵の十義の中、本質に対する説明が、とても簡略になされているため、該当する翻訳用例を探すことはできない。注(15)参照。
- (17) Schmithausen（1971: 145）に従い、vidyate をこのように修正した。
- (18) 種姓という訳語自体は、既に 179 年、支婁迦讖 (Lokakṣema) が翻訳した『道行般若経』（大正 8、460b25 +464b1）に現れる。また、種性という翻訳語も竺法護 (Dharmarakṣa) が 286 年に翻訳した『光讚経』（大正 8,199a1 など）だけでなく、『涅槃経』の訳者である曇無讖 (Dharmakṣema) が玄始 3 年～15 年 (414-426 年) に翻訳した『菩薩地持経』（大正 31、888b3: 性種性、習種性）に多数現れる。
- (19) 水谷（1956: 552）；小川（2004: 74）参照。一方、小川（2004: 70）は『宝性論』の場合、「仏性」の原語として「buddha-gotra」は極めて妥当な単語であると評価する。しかし dhātu と gotra という、極めて密接であるが厳密には異なる概念を同一の用語で翻訳した理由については、潤文の過程が不十

分であったからという感が否めない。

- (20) これに比べて RGV (72,10) では、原因としての *tathāgatadhātu* 概念が *gotra* と関連して用いられる時は、厳格に原因という意味に限定している。これと関連した議論は、金成哲 (2012: 397f.) 参照。一方、*gotra* 概念の導入の理由は、このような多義的な *dhātu* 概念の中、原因の側面を独立させた単語として表現するために導入したものとも解釈できる。
- (21) Schmithausen (1971: 141) に従い、*-sambhāvārthena* をこのように修正した。
- (22) この文章は『宗鏡録』(大正 48、871b8f) に引用されている。
- (23) この文章は法蔵 (643-712) の『大乘法界無差別論疏』(大正 44、68c16) に引用されている。
- (24) ここで、「彼真如性」全体が *tadgotra* の翻訳語であるかについては、疑問の余地が無くはない。他の經典の引用ではあるが、⑭では *tadgotra* を「彼性」と翻訳しており、⑬の『仏性論』も「此性」と翻訳し、真如という単語は見えない点が、これを支持するであろう。高崎 (1999: 170、n.8) も、「彼真如性」に該当するサンスクリット原文として '*tadgotrasya tathāgamaḥ*' 全体を提示している。しかし、この場合、真如が *tathāgama* の翻訳語に該当するのか疑問であり、翻訳語の順序が入れ替わっている理由も説明するのが難しい。反対に、彼真如性が *tadgotra* の翻訳語であれば、*tathāgama* に該当する翻訳語が脱落している点を説明するのが難しい。この問題については、もう少し考察の余地があるが、便宜上、ここでは真如性を *gotra* の翻訳語と見て述べていく (金成哲 2012: 408)。この場合、真如性は真如仏性という翻訳語から、韻律上の理由で、仏を省略したものと理解できるであろう。
- (25) 本論文の執筆過程で、金剛大学校仏教文化研究所の池田将則先生より、既に大竹 (2011:279) が同じ作業を行なっているとの指摘をうけた。池田先生のご教示に感謝申し上げる。
- (26) 金京南 (2009: 54、n.23) によれば、鍵主 (1968) が、翻訳語ではない真如は菩提流支以前に道安により使用されているという点を指摘したが、*tathatā* の訳語としての真如という単語は、菩提流支により確定されたという点が、既に指摘されている (鈴木 1928; 赤沼 1929) という。また、金京南 (2009: 59) は、真如という単語は菩提流支が好んで用いた用語であり、対応語が無い場合にも真如を補充するなどの傾向があることを証明し、これは特に『金剛仙論』で顕著であると指摘する。菩提流支のこのような傾向が、一時共同作業者であった勒那摩提の『宝性論』翻訳にも現れたのかもしれない。
- (27) 文脈上、「浄」を「性」と修正した。
- (28) この句節は『大集経』「無尽意菩薩品」(大正 13、p.197b15-19)「云何第一義諦。若於涅槃法終不忘失。何以故。如与法界其性常故。」と一致する。RGV の日本語訳において高崎 (1989: 302f. n.3) は、中村 (1967: 110、n.3)

が提示したチベット訳『無尽意所説経』に基づいて、これを確認している。ただ、高崎も指摘するように、チベット訳『無尽意所説経』の文章もまた、現存するRGVと完全に一致するのではない。さらに高崎は『無尽意所説経』のこの句節の出典が『宝積経』「迦葉品」であると提示している。しかし漢訳『宝性論』の日本語訳において高崎（1999: 356）は、それ以前の見解とは異なり、この句節が『無尽意所説経』、および『宝積経』「迦葉品」とは異なる資料を引用した文章である可能性も認めている。

- (29) 金成哲（2012: 408）では、如来性を gotra の翻訳語と見なしたが修正を要する。しかし、自体性の場合にも svabhāva だけを翻訳したものであるのか、gotrasvabhāva を翻訳したものであるのかは明確ではない。高崎（1999: 245, n.17）は、「自の体性」と翻訳しながらも、二つの可能性を提示している。ただ⑳の用例に照らしてみると、たとえ語順は反対であるとしても、svabhāva を「自体」、gotra を「性」と翻訳した蓋然性が高いように思われる。
- (30) 特に「真如性」と翻訳された偈頌と散文 CE、注釈の元来の脈略と意味については I 章を参照。
- (31) 『涅槃宗要』（大正 38、249b8-11）「第六師云、阿摩羅識、真如、解性、為仏性体。如『経』言：〈仏性者、名第一義空、第一義空、名為智恵。〉『宝性論』云：〈及彼真如性者、如『六根聚経』説：〔六根如是、從無始來、畢竟究竟、諸法体故〕。〉」
- (32) 『華嚴経探玄記』（大正 35、197a1-7）「種性義略作三門。一積名 … 二出体有二、一性種性、二習種性。性種有二門、一就有為無常門、如『瑜伽』云：〈六處殊勝無始展轉法爾所得（云云）〉。二約無為常住門、如『宝性論』云：〈真如性者、如『六根聚経』中説（云云）〉。」このような法蔵の見解は、淨影寺慧遠（523-592）の『大乘義章』（大正 44,651c21-26）に遡ることができる。「名字如何？性種性者、從体為名。無始法性、説之為性。此之法性、本為妄隱、説之為染。隨修対治、離染始顯、説以為淨。始顯淨徳、能為果本、目之為種。此乃顯性、以成種故、名為性種。種義不壞、故復名性。故『論』説言：〈性種性者、無始法爾〉」。この中、〈性種性者、無始法爾〉というのは『菩薩地持経』（大正 31、888b4-5）「性種性者、是菩薩六入殊勝。展轉相續。無始法爾。」の文章であり、上の元暁と法蔵が引用する『宝性論』の文章、すなわち㉑に続く文章と同一である。
- (33) 金成哲（2012）参照。金成哲（2012）はRGVに現れる種姓概念だけを扱ったが、『宝性論』と『仏性論』の対応する翻訳の文章でも種姓無為論の痕跡を探すことはできない。
- (34) 対応する『宝性論』では、これに該当する翻訳が現れていない。
- (35) 『仏性論』（大正 31、794a8-21）では三因と三種仏性とを扱っており、『仏性

- 論』(808b15-c28)では『如来藏經』の九つの譬喩と関連した如来藏の三義を説明しながら、住自性性と引出性という二つの仏性を詳細に扱っている。
- (36) 高崎(2005: 121, n.8-10)も、この二つの翻訳語のサンスクリットの前語として prakṛtisthagotra と samudānītagotra とを提示しているが、第三の至得性という用語については原語が不明確であるという。住自性性と引出性の原語が「prakṛtisthagotra」と「samudānītagotra」であった可能性は、如来藏の三義と関連して住自性性と引出性を説明する『仏性論』(808b15-c28)で明確に現れる。
- (37) 二空所顕という用語は、唐代以前の文献には『仏性論』と真諦訳『撰大乘論釈』以外には現れない。石井(2012: 111)
- (38) 『仏性論』(大正 31, 794a8-12)「復三因者、一応得因、二加行因、三円満因。応得因者、二空所現真如。由此空故、応得菩提心、及加行等、乃至道後法身、故称応得。」
- (39) 『仏性論』〈縁起分〉(大正 31, p.787b4-5)では「仏性とは、すなわちこの人と法の二空により特徴付けられる真如である(仏性者、即是人法二空所顕真如)」という句節が見える。
- (40) 『仏性論』(大正 31, 794a16-18)「此三因。前一則以無為如理為体。後二則以有為願行為体。」
- (41) 前の二つの種姓に対する説明は『瑜伽師地論』〈菩薩地〉(BoBh 3,1,4: tatra gotraṃ katamat. Samāsato gotraṃ dvididham. prakṛtisthaṃ samudānītaṃ ca. tatra prakṛtisthaṃ gotraṃ yad bodhisattvānāṃ saḍāyatanaviṣeṣaḥ. sa tādr̥śaḥ paramparāgato 'nādikāliko dharmatāpratīlabdhaḥ. tatra samudānītaṃ gotraṃ yat pūrvakuśalamūlābhyāsāt pratīlabdham.)に由来する。
- (42) 『仏性論』(大正 31, 794a18-19)「三種仏性者、応得因中具有三性。一住自性性、二引出性、三至得性。」
- (43) RGV (71,18-72,2) : gotraṃ tad dvididham jneyaṃ nidhānaphalavr̥kṣavat anādīprakṛtisthaṃ ca samudānītaṃ uttaram //149// buddhakāyatrayāvāptir asmād gotradvayān matā / prathamā t prathamaḥ kāyo dvitīyād dvau tu paścimau //150//
- (44) 『仏性論』(大正 31, 808b15-16)「仏性有二種。一者住自性性。二者引出性。」
- (45) これに続く注釈的な説明では、住自性仏性を凡夫の段階、引出仏性を修行の過程にある修行者の段階、至得性を無学の聖者と説明している。『仏性論』(大正 31, 794a19-21)「記曰、住自性者、謂道前凡夫位。引出性者、從發心以上、窮有学聖位。至得性者、無学聖位。」引出仏性に関する同一の説明が『仏性論』(大正 31, 808a1-3)「二者引出仏性。從初發意、至金剛心。此中仏性名為引出。」にも現れる。すなわち『仏性論』は、二つ、あるいは三つの仏性、すなわち種性を修行の段階別に配置しているのである。種性を修行の段階として区分する発想は RGV には現れない『仏性論』独自のも

- のと見られる。しかし種姓を修行の段階に区分するのが、ブッダの三身の産出とどのような関係があるのかは明確ではない。
- (46) あるいは RGV k.149 の最後の句節である *uttaram* を、*samudānītam* を修飾するものではなく、別個の単語と解釈した可能性もある。高崎（2005: 121, n.10）は『大乘莊嚴經論』に現れる *paripuṣṭagotra* に該当するのかわからないが、意味は引出仏性と異ならないと見ている。
- (47) 「具有」は基本的に含むことを意味するであろうが、内容的には三因と三種仏性は対応関係を持つと理解できる。
- (48) 『仏性論』（大正 31、795c24-25）「仏説約住自性如如、一切衆生是如来蔵。」
- (49) RGV 25,18: *tatra samalāṃ tathatāṃ adhikṛtya yad uktaṃ sarvasattvās tathāgatagarbhā iti ...*
- (50) これに関連して、法蔵の著作に現れる真如随縁という概念を考察した石井（2000、特に 163-171）の議論が興味深い。石井（2000: 169）は「心を中心とする真如随縁の図式が定着してきたのには、『勝鬘經』、『涅槃經』などの仏性、如来蔵説、『楞伽經』の如来蔵説に基づいた心識説、および中国思想との結合が大きな役割をしたものと推測」している。『宝性論』と『仏性論』で、仏性、あるいは如来性という翻訳語で新たに紹介された如来蔵思想の種姓説は、このような脈略を背景として受容されたものと見るができる。
- (51) RGV 21,3-4: *samalā tathatātha nirmala vimalā buddhaguṇā jīnakriyā / viṣayaḥ paramāṛthadarśinām śubharatnatrayasargako yataḥ //23//*
- (52) RGV 36,13-14: *na ca bhavati tāvad yāvad āgantukamalaviśuddhigotraṃ trayāṇāṃ anyatamadharmādhimuktiṃ na samudānayaṭi ...*
- (53) このような見解は、多少、後代のアバヤカラグプラ (ca. 1100) にも現れる。Ruegg（1977: 286、299、302.）参照。このような『現觀莊嚴論』の見解が、チベットで『宝性論』の種姓概念に対する解釈に影響を及ぼしたという事実は、既に『現觀莊嚴論』に対するツォンカパの注釈からも確認された。注(1)参照。したがってチベット仏教の如来蔵思想の伝統において種姓を無為である法界と見なすことは、『現觀莊嚴論』の影響によるものであることはほぼ確実である。
- (54) 『現觀莊嚴論』（AA 17,9）: *ādhāraḥ pratipatteś ca dharmadhātusvabhāvakaḥ //5//*; Yamabe（1997: 202、n.49）参照。
- (55) 『現觀莊嚴論註』（AAV 76,17-18）: *tad anena dharmadhātur evāryadharmānām hetuvāt prakṛtiṣṭhaṃ gotraṃ pratipattiyādhāra ity upadarśayati /*; Yamabe（1997: 202、n.52）参照。
- (56) 『現觀莊嚴論註』（AAV、76,24-77,4）: *śaḍāyatanaviśeṣo gotraṃ tac ca* dvidivdham: pratyayasamudānītaṃ, prakṛtyavasthitaṃ cety apare / taiḥ prakṛtiṣṭhaḥgotre*

prakṛtyabhidhānasyārtho vācyaḥ / kāraṇa-paryāyaś cet tad api pratyayasamudānītam / iti ko 'rtha**-viśeṣaḥ / dharmatā-paryāye punar eṣa doṣo nāsti / prajñapatikaṃ vā teṣāṃ gotram, idaṃ tu lākṣanikam / iti*** na tenādaḥ saṃgacchate /; Yamabe (1997: 202, n. 50 + n.52) 参照。

* AAV: tad; Lee (forthcoming) に従って修正した。

** AAV: kim artha-; Lee (forthcoming) に従って修正した。

*** AAV: ato; Lee (forthcoming) に従って修正した。

- (57) nanu ca dharmadhat̄ or gotratve* sarvo gotrasthaḥ prāpnoti, tasya sāmānyavartitvāt. yathā cālambyamāna āryadharmāṇām hetur bhavati, tathā gotram ucyata** iti kim atrātiprasaṅgaṃ mṛgayati /

*Yamabe (1997: 202, n.52), Lee (forthcoming) に従い gotratvam を gotratve に修正した。

** Yamabe (1997: 202, n.52) に従い、ダングを除去した。

翻訳は Yamabe (1997: 202 + n.52) 参照。種姓を無為と見なしたとしても、それを認識対象、すなわち所縁縁としてだけ限定する『現観莊嚴論』の立場は、東アジア仏性思想において無為を因縁と拡大して理解する態度と嚴格に区分される。

- (58) 事実『現観莊嚴論』の種姓論は、一種姓説 (ekagotra) の立場で三種姓説 (trigotra) を統合主義 (Inclusivism) 的に折衷したものと見ることができる。AA k.40: dharmadhātor asambedād gotrabhedo na yujyate / ādheyadharmabhedāt tu tadbhedāḥ pariḡyate // 40 //

- (59) 高崎 (1974: 754, 773) は、9-11 世紀にかけて『現観莊嚴論』が流行し、この時期に『宝性論』が復活することにより、中観哲学を基調とする種姓無為説が展開したと指摘している。このような種姓無為説の起源は、『現観莊嚴論』それ自体、そしてそれに対するアーリヤ・ヴィムクティセーナの注釈に見られるであろう。

- (60) 『中辺分別論釈疏』(MAVṛ 56.4-6) : sarvasattvasya tathāgatagotravād atra gotram iti tathatā* jñeyam ity anye /

* Yamabe (1997: 445, n.29) に従い、Yamaguchi の還梵 tathātvaṃ を tathatā と直して読んだ。

- (61) 真諦はウジャイニ出身であり、安慧が活躍したヴァラヴィーと地域的に近い。さらに真諦は安慧の師匠である徳慧の『隨相論』の翻訳もしている。しかし真諦と安慧との関係について船山 (2012: 5f) は、より慎重が必要であるとする。

略号と参考文献

- AA *Abhisamayālaṃkāraloka Prajñāpāramitāvyaḥyā*, ed by U. Wogihara, Tokyo, the Toyo Bunko, 1932 (repr. 1973)
- AAV *L'Abhisamayālaṃkālavṛtti di Ārya-Vimuktisena: Primo Abhisamaya*, eds. Pensa, Corado, Roma:Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1967.
- BoBh *Bodhisattvabhūmi*, ed., by U. Wogihara, Tokyo, 1930-1936 (repr. Tokyo, 1971).
- MAV† Sthiramati, *Madhyāntavibhāgaṭkā*, par S. Yamaguchi, Nagoya, 1934 (repr. Tokyo, 1941) .
- MSA *Mahāyānasātrālaṃkāra*, tome texte, éd. par Sylvain Lévi, Bibliothèque de l'Ecole des Hautes études, Paris, 1907.
- gSer phreng *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan btses mngon par rtogs pa'i rnyan 'grel ba dang bcos pa'i rgya cher bshad pa legs bshad gser gyi phreng ba zhes bya ba bzhugs so*, 青海：青海民族出版社，1986.
- RGV/R *The Ratnagotra-vibhāga Mahāyānottaratantraśāstra*, ed. by Edward H. Johnston, Patna: The Bihar Research Society, 1950.

- 『光讚經』西晋 竺法護 訳、大正蔵 8、No.222.
- 『道行般若経』後漢 支婁迦讖 訳、大正蔵 8、No.224.
- 『大集経』隋 僧就 合、大正蔵 13、No.397.
- 『菩薩地持経』北凉 曇無讖 訳、大正蔵 30、No.1581.
- 『仏性論』 / 『仏』真諦 訳、大正蔵 31、No.1610.
- 『宝性論』 / 『宝』後魏 勒那摩提 訳、大正蔵 31、No.1611.
- 『華嚴経探玄記』唐 法蔵 述、大正蔵 35、No.1733.
- 『涅槃宗要』新羅 元曉 撰、大正蔵 38、No.1769.
- 『大乘法界無差別論疏』唐 法蔵 撰、大正蔵 44、No.1838.
- 『大乘義章』隋 慧遠 撰、大正蔵 44、No.1851.
- 『宗鏡録』宋 延寿 集、大正蔵 48、No.2016.

金 京南 (キム・キョンナム)

- 2009 「菩提流支訳 諸経論の訳語について」、『仏教学レビュー』6、論山：金剛大学校 仏教文化研究所、35-64 (= 「菩提流支訳諸経論の訳語について」、『地論思想の形成と変容』、東京：国書刊行会、94-117、2000 = 「菩提流支訳諸経論の訳語について」、『地論思想の形成と変容』、ソウル：シーアイアール、124-151、2000)

金 成哲

2011「種姓の本質に対する瑜伽行派と如来蔵思想の解釈」、『仏教学レビュー』10、ソウル：シーアイアール、35-68.

2012「『宝性論』に現れた種姓の性格」、『普照思想』38、ソウル：普照思想研究院、381-413.

車 相燁 (チャ・サンヨプ)

2013「『宝性論』に現れた如来蔵の三つの意味」、『普照思想』39、ソウル：普照思想研究院.

石井 公成

2000「随縁の思想」、『北朝隋唐中国仏教思想史』（荒牧典俊編著）、京都：法蔵館、154-178.

2012「真諦関与文献の用語と語法 -NGSMによる比較分析」、『真諦三蔵研究論集』（船山徹編）、京都：京都大学人文科学研究所、87-120.

大竹 晋

2011『金剛仙論』上、下、東京：大蔵出版

小川 一乗

2004『小川一乗仏教思想論集 - 第2巻 仏性思想論 II』、京都：法蔵館

水谷 幸正

1956「仏性について」、『印度学仏教学研究』4-2、東京：日本印度学仏教学会

高崎 直道

1974『如来蔵思想の形成』、東京：春秋社

1989『インド古典叢書 - 宝性論』、東京：講談社

1999『宝性論』、東京：大蔵出版.

2005『仏性論 大乘起信論』、東京：大蔵出版

2010『高崎直道著作集 第7巻 - 如来蔵思想 仏性論 II』、東京：大蔵出版

中村 瑞隆

1967『蔵和对訳 究竟一乗宝性論研究』、東京：鈴木学術財団

船山 徹

2012「真諦の活動と著作の基本的特徴」、『真諦三蔵研究論集』（船山徹編）、京都：京都大学人文科学研究所、87-120.

Ruegg, D. Seyfort

1976 The Meanings of the Term "Gotra" and the Textual History of the "Ratnagotravibhāga", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, University of London, Vol. 39, No. 2, 341-363.

Schmithausen, Lambert

1971 Philologische Bemerkungen zum Ratnagotravibhāga, *Wiener Zeitschrift für*

die Kunde Südasiens 15, 123-177.

Yamabe, Nobuyoshi (山部能宣)

1997 The Idea of Dhātu-vāda in Yogācāra and Tathāgatagarbha Texts, *Pruning the Bodhi Tree*, ed. By jamie Hubbard & Paul L. Swanson, Honolulu: University of Hawai'i Press, 193-204.

(翻訳担当：佐藤 厚)